

シンポジウム・抄録

「どう創る？ 浜松の多文化共生社会」

川北

お集まりいただいた4人のパネリストは、行政、地域づくりを全般に行うNPO、コミュニティの方への情報提供という分野でご活躍の方々です。

最初に、プレゼンテーションを聞いていただいた感想として、本日のテーマ「どう創る？ 浜松の多文化共生」に沿って、このまちの地域づくりにプレゼンテーションのアイデア、ヒントをどう生かしていくか、議論いただきたいと思います。

安井

行政と市民の協働というテーマですが、発表された方と本日参加されている方も、NPOないしはボランティアの方とお見受けしますので、私だけが行政という立場からの発言となりますが、よろしく願います。

6人の方の発表をお聞きしまして、行政側との協働という観点から考えますと難しい問題があります。どういう仕掛けとどういう動かし方で行政を引っ張り込むかという点を、もう一工夫されることが重要だと思います。自分達がいいことをやっているから、行政は支援していくのは当たり前だと考えているのでしたら、少し難しい問題があらうかと思います。行政と市民の協働を前進させるためにどうしたらよいか、それが本日の私からのメッセージになるでしょう。

山口

ようこそ浜松においでくださいました。まずお伝えしたいのは、浜松NPOネット

ワークセンター（N-Pocket）は、多文化事業だけをやっている団体ではないということです。子どもと障害者と高齢者と外国人を少数者として、その方達に寄り添い、力づけることによって浜松市民が自立していく仕組みを作りたいというのが、私どもが多文化事業に関わったきっかけでございます。6人の発表を伺って、それぞれの地域の問題は共通していると思いましたが、少し辛口を申し上げると、サポートして差し上げる立場の報告が多かったと思います。セルフヘルプ＝自立の支援やエンパワーメントするプロセスをどう作るかというところで共通した課題があると思います。N-Pocketの立場は、異なる文化を持つ他者を迎えることによって、私達のコミュニティが変わりたい、日本人の地域社会を変えたいと思っておりますので、そういう展望を拓くために改めて考えさせて戴こうと思います。

もう1つは、具体的な個別のテーマに関わっておられても、彼らの暮らしの全体像を見ることが大事だと思います。私達N-Pocketは、言葉、医療、労働や生活のグループ、外国人自身のセルフヘルプグループなどと多角的にネットワークをしております。個々の活動が、地域の中でどのようにネットワークされていくか、その展望を見せていただければ、私達ももっと勇気が出てくると思いました。今後を期待しています。

川北

ありがとうございました。地域の展望については、福祉の分野では「一点突破、水

NPOによる具体的なプログラム提案

平展開」という言葉があります。個々のプログラムをどのように水平展開させていくかということは、後程お話ししたいと思います。続いて、内山さん、お願いします。

内山

私は6年前から浜松市で在日ブラジル人を対象にポルトガル語の新聞を作っております。今日の発表を聞いて、私達が捉えている現状と皆さんが捉えている現状では、時間差があると感じました。われわれの読者対象は就労を目的としてきていますので、1番困っていることは失業です。先日、日本の失業率が5.3%と出ましたが、恐らく外国人労働者はそれ以上だと思われま。ここ半年位で、浜松市でも失業を原因としたマイナスの現象が幾つか起きております。ブラジル銀行で強盗があったり、派遣会社に給料目当ての泥棒が入ったり、犯人はいずれも在日ブラジル人で、いずれも失業者でした。そういうことから子ども達も大事ですが、もっと大人のことも考えなければいけないと考えております。

それから、われわれの認識では、外国人はもうすでに、「定住化」から「永住化」に向かっているのではないかと思います。2000年の名古屋入国管理局浜松出張所の永住許可申請は約600人でしたが、今年には既に9月で千人を超える状況になっております。その理由は様々ですが、永住を考えているとなると、二世のこと、また一世の老齢化の問題にもなってくると思います。先日、浜松国際シンポジウムの浜松宣言の中で、社会保険と年金を分離する制度という現実的な提言がありました。一世が日本に10年いると60歳位になる方も多いわけで、その方達が年金に入りたくても入れない状況も事実あります。ですから、更に先へ進んだ考えをしていかなければいけないと思っております。

川北

ありがとうございます。先端的なことには未知なことが多いのですが、NPOや市民団体は、目の前にある現象だけを捉えるのではなく、その背景や、具体的な事実として何が起きているのかということをしっかり捉えて動くことが大切ですね。では、加藤さん、お願いします。

加藤

こういう活動をして頑張ってますという話を聞くことが多い中で、今回のプレゼンテーションは、ささやかな企画かもしれませんが、未来に向けたものになっていたのではないのでしょうか。これらの企画は、地域の社会的な課題を具体的に解決しようと思っ公共領域を大いに担っているという力の全体像がそれぞれの団体の方達にあって、初めて出てきたものだと思います。そこから、非常に大きな潮流がますます目に見えるようになったと実感しています。

ですから、これはNPOや市民活動が正しいことやって頑張っているからお金をくださいという行政との交渉の話ではありません。基本的には、社会的、公的な資源を未来に対してどのように投資するか、あるいは選択するかというお話に必ずなっていくだろうと思いますし、今回のプレゼンテーションは、そのような方向性を持っていたと思います。

川北

ありがとうございました。では討論に入っていきたいと思。います。

地域を変えていくときに、戦略や展望が必要ではないかというかというお話がありました。外国人が定住化、永住化していることを考えると、目の前の問題と、少し先の問題と、2つの視点を持って考える必要があると思。います。NPOは今まで、とにか

く目の前の問題に対処することが中心でした。そこで、浜松において今後、特に緊急性が高い、あるいは重要な問題なので取り組みの準備だけは始めておいた方がいいもの、という点で議論を深めてまいります。

内山

緊急性ということでは、雇用問題、とくに失業によって生じてきた負の現象があげられます。1つは、ホームレス化です。彼らの多くはブラジル国内の経済的状況が悪いということを承知していて、失業してもぎりぎりまで日本にいたいという気持ち強いのですが、就職先がないと結局ホームレス化してしまうという現状があります。また、ブラジル国内ではブローカーが、日本の状況が悪いにもかかわらず、情報を正しく伝えずに日本に人を送り込む。それが来日して数ヶ月、仕事ができないままホームレス化してしまうということもあります。

それから負の現象の第2点目として、子ども達はその被害を受けて、親が経済的に苦しくなって、子ども達を学校に行かせなくなるというケースが増えています。浜松の幾つかのブラジル人学校はそういう子ども達に対して授業料を免除するなどして就学を促していますが、思うようにはいかない状況です。

重要性で考えますと、永住化傾向に対する対策で、1つは一世の老齢化問題です。滞在10年で夫婦揃って60歳近くになって、今から年金に入れないかという相談を結構受けております。それから在日二世の問題では、彼らの半数位は純粋な外国人との混血児で、われわれ日本人とは違った顔をしていますので、その人達に対する差別が必ず生まれてくるのではないかと思います。

川北

山口さん、浜松というまちに長い展望を

NPOによる具体的なプログラム提案

持ち、地域のプログラムや活動を組んでいくときに、視野に置かなければならないことは何でしょうか。

山口

医療に関して言えば、浜松には外国人医療援助会がございまして、今年で6年目で、約580人の外国人の方達に無料検診会をいたしました。二次検診が必要な方は昨年の510人の受診者の内約80だったのが、240人に増えています。内山さんが指摘なさったように、普通の暮らしができない状況があると危惧します。教育を受ける権利と健康に生きる権利だけは地域社会の人と同じように保障していくことが何とかできないでしょうか。

私が中長期で考えたいことは、どうやって職業選択の自由を保障していくことができるかということです。優れた能力を持っている方達がブルーカラーで、しかも派遣会社が派遣しているのでは、浜松市にも彼らにとっても、もったいないと思います。従って高校の進路選択の問題に少し重点をおいていく必要があると思います。

もう1つは、私達の地域社会の中だけで解決しようと考えないで、外国の力を大いに借りていいと思います。N-Pocketの米国の姉妹団体はブラジルで健康教育をおこなっています。そのコーディネーターがブラジル人で、その方に浜松に来ていただいて、ブラジル人向けの健康セミナーを共同開催しました。それには保健所の協力もあり、それを通じ保健所が日系ブラジル人の通訳を中心に一步踏み出されたことがあります。

それから、私達は外国人のマイナス面ではなくプラス面を戴きたいという思いを持っています。4月におこなった路上演劇祭では、芸術性の高い浜松のブラジル人劇団が、大学生と一緒に活動を始めるきっかけづくりをしました。また、メキシコでスト

NPOによる具体的なプログラム提案

リート・チルドレンを支援している演劇団体を招いて、日本の小中学校に通うブラジル人の子ども達に演劇ワークショップを開催してもらったのですが、次のステージでは、浜松のブラジル人劇団が、自分のコミュニティの子ども達のために演劇ワークショップを行う予定です。それに関った人たちが、子ども達の自己表現と自己実現、アイデンティティの確立の大切さを考えながら、時には日本の子どもや青少年にも入ってもらい、なぜ外国人の子ども達が学校からドロップアウトしていくのか、ドラッグなどの危険なことに走るのかというリサーチをする構想があります。

先程のプレゼンテーションで少し足りないと感じたのは、ブラジルの方、中国の方達自身が彼らの文化を自己表現できていく土壌をどう作るか、NPOが仕掛けていくかという点です。その中には私達が学ぶことがたくさんあり、成長するきっかけにしたい。もし浜松にその人材がいなければ、海外から人材と経験を拝借しながらできるのではないかと思います。

川北

続いて安井さんから、行政も予算がふんだんにあるわけではないですし、優先課題は常に問われることと思います。緊急性と重要性という視点でコメントをいただいてもいいでしょうか。

安井

浜松市は長期政権の市長から新しい市長になり、特に市民参加と協働ということを市政の基本的な方針に掲げています。行政経営課の市民協働グループが、市民活動の基本指針を市民の皆さんと作っていて、来年2月か3月頃を目処に、市民とNPOとの協働や連携について、基本的な行政の考え方が示されていくでしょう。

浜松について考えていただきたいのは、

自治会や様々な団体、組織が地域作りに参画してきた中で、この地域社会が成り立っているという現状です。NPOやボランティアグループの方は、パートナーとして当然、行政も選んでいただければ結構ですが、これまでまちづくりを担ってきた組織をもう一度振り返って考えていただくと、より効果が出るのではないかと思います。

80～90年代から作られてきた各都市の国際交流協会では、行政よりもより市民の参加の中で国際交流を進めていこうという目的の元に作られていると思います。ですから、国際交流協会とのパートナーシップの構築もかなり手っ取り早いのではないかと思います。後押しとか協力体制が欲しい場合には、足元を見て、どういう相棒が1番身近ににいるか、使いやすいかと、少し視野を広げていただくと、結構近くにいいパートナーがいる気がします。

川北

今、キーワードとして協働という言葉をいただいたので、ぜひ加藤さんに協働のプロとして、進め方や、課題についてお話いただいてもいいでしょうか。

加藤

安井さんや山口さんがおっしゃったことに繋がるとは思いますが、まず、これまでの市民活動団体は行政との協働についてあまり考えなかった。これは恐らく変わってくるでしょうし、地域で資源を調達するような少し立体的な構造を作ることを通して、パートナーを見つけていくようになると思います。現に各地でそれに協力する市民や企業の皆さんが非常に増えています。仙台は100万人の人口をかかえる地方都市ですが、企業の社会貢献が目立たない地域です。でも私どもは、この1年半掛けて、企業から約230万円のお金を、また、中古のパソコンを約100台、机、椅子を約1

50台継続的に市民団体へ提供する2つの仕組みを作りました。例えば今回のプレゼンテーションのどれか1つに、おいでになった皆さんが投資するようなチャリティであったらどうでしょうか。1万円の会費でちょっとパーティも付いていて、それを6つのうちどれかに自分の名前と住所を書いた紙を預けたら、その団体にお金が寄付されて、後から報告書が来るということが実現したら嬉しいとは思いませんか。そういうことは日本の中でもっと当たり前にしたと思います。

もう1つは、行政に企画を選んでもらうという感覚ではなくて、佐藤さんのプレゼンテーションにもあったように、地域のNPOや行政の人が皆で考え、幾つもの企画を緊急性と重要性に分けて優先順位をつけることや、誰の資源でやるべきだということ、地域で合意しながらすすめていく。行政とパートナーを組んできちんとお金を出したほうがいいものを作っていくと同時に、自分達が地域から調達すると決めたことを3つや4つに絞って、市民に向かってキャンペーンするとか、そういう方法がどんどん生まれてくるのではないのでしょうか。

川北

すると、企業や地域住民自らが主体的に動くことが大切かと思えます。当事者が自己表現したり参加したり、運動を作る主体になることは、年金加入の問題でも大切だと思います。さらに、当事者の方々が訴えるだけではなく、こう解決してくれるところ動くのではないかという提案タイプの運動には、外部の方も応援しやすい。行政の方も一緒に考える当事者になるような関係作りが、日本でもようやく進んできたと思えます。山口さん、定住化が進んでいく浜松で、実際に外国人の方々が主体となってプロセスを作っていくモデルに繋がるアイデアやヒントをいただけたらと思います。

山口

外国人のコミュニティはそれぞれ孤立化していて、その言語だけで生活できる環境がすでにできています。そこで主体を担う方達をどう探すかというのは、極めて重要な問題で、どこにどうやって情報を持っていけばどういうところに繋がるかという情報ネットワークをつかむことは、すごく大事ではないでしょうか。

私達は多文化事業を始めてまだ2年ですが、表現する人を掴むことが早道だと感じています。文化的な背景をきっちり持った表現者を探し、その方が表現してくだされば、日本人の目を引きます。彼らがブルー・カラーでマニュアル・ワーカーであるというイメージから、「違うんだ」ということを行政や国際交流協会、大学に橋渡しする時に、彼らが持っている力と、彼らがパートナーかどうか見抜く力をNPO側が持っていかなければならないと思います。

川北

定住や永住が進みコミュニティが形成される中で、内部で深刻化して外に見えにくくなっている課題を、外部にどう表現するかということでは、それを伝える力を内部で持つか、あるいは外部の人間が支援して、重野さんの発表にあったように、研究というプロセスを通じて、調査して、報告していくプロセスもあります。加藤さん、他の分野で成功した事例を教えてくださいか。

加藤

当事者は非常に重要です。HIVの世界で、自分達自身を守るためにゲイの方が集まって始めた電話相談が、社会に対して窓を開いていくという例があります。つまり社会に対してサービスを供給する側になることで、多様な関係ができ、自分達をもう

NPOによる具体的なプログラム提案

1度見直して、エンパワーメントしていく入り口がそこにあるようです。そういう意味で、外から関わる触媒的な人を見つけるのが何らかの形だと思います。

重野さんや山本さんの発表は言葉で伝えることが主力だったようですが、山口さんの演劇の話聞いて、参加型で演劇を作っていく伝えの方がはるかに現場で伝わると感じました。

イギリスのロンドンという街のある地区で、50%位が外国人で、失業率が40%ぐらいになったというところがあります。経済的に地盤沈下しスラム化するような地域で、市民がコミュニティ・センターを作ったケースがあります。市民が社会からお金を集め、一部行政の補助金を入れて作る。そして彼らがまず取り組んだことは、貧乏な芸術家をその地域に住ませ、コミュニティセンターをアトリエとして使う代わりに、地域の子供達に無料で絵などを教えてもらう。そのようにアーティストがコミュニティセンターの成長と共にいるいろいろな形で関わってきて、精神障害のある方や子供達などの援助をしていくケースがあります。イギリスで社会起業家と呼ばれる人たちが、そういうものを仕掛けていて、行政や企業といろいろな人を繋いで、物事を成し遂げていくネットワークになっています。まさに今日、発表された人もわれわれもその卵で、そういう力を持ちたいと思っています。そのためには1つの拠点的な場がうまい形でコミュニティの中に形成されて、立体化してくる必要があると思います。それはモノとは違い、地域で活動しているグループが持つサービスが、集合して、ソフトになる、という構造をいかに地域で支えるか、あるいは外から支えるかという構想なのです。

川北

もう1度、安井さんにお聞きしたいので

すが、市民は目の前に課題があると、さっさとプログラムを作って行動を始めます。そういう意味では市民の反射神経や現場に対応していく力は大切だと思います。では、もう少し広く、時間的に長い目で見てらっしゃる行政は、このまちの中でどういう役割、プログラムを敷いていこうとしておられるのでしょうか。

安井 なかなか深遠な質問です。明治以降、地方自治体が地域経営を担って今まで曲がりなりにもやってきた。今、地方分権とか持ち上げられてはいるものの、権利や財源は、まだまだ国から全てが移譲されていません。しかしながら主体として地域経営を担っているのが自治体だとすれば、地域の将来的なビジョンを示していくことは、その自治体の第1の役割ではないかと思えます。

反射神経の優れているNPOの方々が目の前にある問題の解決や得意分野で活躍していただくというのは時代の趨勢だと思います。行政とNPO、ボランティア、市民の方々の取り組みがどのように結び付いていくかということについては、どの自治体や地域でもその明確な答えが出ているわけではないと思いますが、方向性としては、手を携えていくべきであろうということは事実でしょう。それをどのように仕掛け、資金の導入と人的な支援を行い、活動のプロットにNPOの人達が立って、責任は行政が取っていくという形を作っていくのか。試行錯誤しながら、成功例と失敗例が山ほど出てくる中で、その答えが出てくるのではないかと思います。

日本財団がこのセミナリオをここ浜松で開催され、本日発表されたNPOの方々が提案を地域に持ち帰り実施し、その後の活動報告をぜひ再び開催していただいて、皆で結果を検証しようということを積み重ねていくことが大切だと思います。そ

ここでは先程の課題に通じる報告もなされると思いますし、息の長い取り組みではないかと思います。

川北

時間の関係もありまして、最後のコメントを一言ずつ順にお願いいたします。

山口

今年の6月に日本財団の支援をいただいて医療支援市民団体全国交流会を開催しまして、全国12ヶ所、9グループが集まりました。それぞれの地域性がよく出ておりましたが、今後の共通課題を外国人集住都市会議にNPO側から提言をさせていただきますまして、今後も、精神医療学会、精神衛生学会に医療通訳の専門家を育てるという提言をすることになっています。外国人集住都市会議が継続されることを期待していますし、その際に様々な問題でNGO、NPOがカウンターパートとして全国交流会をぜひやりたいとの意見も出ています。そうしてNPOが専門的なノウハウを身に付けていくことを実現したいと思っています。

内山

私どもがやっている新聞発行で、皆様のお手伝いができるのであれば、その情報をコミュニティや日本人に提供することだと思います。創刊して6年になり、当初より子ども達や在日二世のことを考えて、1ページだけ日本語で紙面を作っております。しかもルビを入れて外国人の方にも読みやすいように作っているつもりです。時々、公務員や政治家の悪口など辛口のことを書きますが、わかっていたかなければならないから書くのであって、それが私達の役目だと思っています。今日皆様の発表を聞いて、非常に勉強になりました。皆様の活動の中で手伝えることがあったらぜひ声を掛けていただきたいと思っています。

安井

浜松では様々な研究者の方々が多面的に調査して提言もいただいています。また、佐鳴台地区の「外国人とのふれあいトーク」や、ブラジルコミュニティ・グループのアラ・ブラジル協会のように、いろいろなグループや個人が浜松の地域共生の取り組みに関わってくださっています。その中で、NPOやボランティアの方が彼らと手を結んで、いいところは学ぶ、弱いところは少し補っていただきながら、個々に得意の分野を進めていただくことが大事ではないかと思います。そして、いつでも何なりと行政＝国際室にご相談いただければと思いますし、何かできることがあれば行政も後押しします。そういう中で協働を現実の問題として提示していくことが1番だと思います。あまり理論が先走ったり、コストの問題ばかりにとらわれるとうまくいきませんので、一步一步着実に動くことが大切ではないでしょうか。59万市民は冷静な目で見ています。パフォーマンスよりも、誰のためにどういう成果が上がったかということが今後問われてくると思います。

加藤

協働で1番大事なのは、安井さんが言われたように、どんどん相談に来いとか、相手のやっていることがわかるとか、接触面積がいっぱいあることだと思います。お互いに様々なギャップがあり、誤解があるので、相互に学び合うプロセスが大切で、それなしに何かを押し付けるとか、利用するという関係だけでは長期的にうまくいかないと痛感しています。もう1つ、行政の仕事で1番大切なのは、お金を出す前に、多様な活動や現場の問題が存在していることに対する社会的な認知をいかに作るかです。これはコストを掛けなくてもできることで、その認知があれば、活動がすごく楽になり上手に発展する可能性があります。それは

NPOによる具体的なプログラム提案

協働を進める上での大きな前進にもなるのではないかと思います。そしてNPOの側はもっと勉強して、マネジメントの力を上げて、多くの人に理解をしてもらえる提示の仕方や、お金集め、人が参加してくるような仕掛けをどう身に付けていくか、これは長くて簡単ではない課題ですが、本気で取り組むしかしょうがないと思います。

川北

最後に一言。ある病気をどう防ぐかという前に、その病気が起きる原因は何かということを考えなければいけません。こういった分野はソーシャル・マーケティングと呼ばれています。今日のお話の中に「時間差」ということが出てきましたが、疫学的アプローチもそのひとつです。今、目の前で起きていることにどう対応するかという活動をしている私達は、その背景にあることを指摘するだけではなくて、この問題を一緒に取り組んでいくパートナーは誰がいいか、どういうふうにいるいろいろな人達を巻き込んでいけばいいか、そういう戦略を持ったほうがいいと思います。それは山口さんのおっしゃった戦略とか展望という話に繋がってくると思います。NPOは目の前の問題に対して7つ提案するだけではなくて、少し先のことも含めて7つ位提案できるようになると、いろいろなタイプのパートナーが付いてきてくださると思います。

皆さん、どうもありがとうございました。